

# 玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書

1 9 7 1



青森市教育委員会



遺跡遠景（駒込部落より月見野台地を望む）



遺跡遠景（月見野霊園より眼下ー帯が月見野台地）



青森市管内図

1/50,000

## 序

都市化の推移の著しい本市にとって開発事業と遺跡の保存問題は緊急でしかも重要な課題となっております。

事前に遺跡の分布調査を実施し、都市計画、工事計画の段階において開発側と担当行政当局との連絡を密にすることによって、保存し活用することが望ましい姿なのですが、現実では思うように事が運ばず、きわめて困難な行政の一つにあげられております。

やむを得ず破壊されるものについては綿密な発掘調査を行って記録を保存し、それを後世に伝えることは、われわれに課せられた責務であることはいうまでもありません。

われわれはこのような基本的態度をもって本発掘調査を実施してきたものであります。

この遺跡の発掘調査第一次は昭和44年10月不十分な調査体制のうえ、ブルドーザーによる採土作業のあい間をぬって調査を行なうという、まことにあわただしい中で、しかも初冬のみぞれにうたれながらの困難な作業にたずさわってくださった調査員、高校生の方々、また第二次の45年度は、国・県からの補助金の交付を得、この遺跡作業に従事して下さった人達のご苦労に深く感謝申し上げます。おかげで縄文時代前期の集落の解明に多大の成果を上げることができました。

本報告書はその成果をまとめたものであり、今後の研究調査の資料として活用されることを願うものであります。

終りにこの調査を担当し指導された井上久青森市文化財審議会委員、発掘の最初から最後まで献身的な作業をつづけてくれた葛西励青森山田高校助教諭、労苦をいとわず調査報告に尽力してくれた三宅徹也青森県立郷土館主事等の方々はもちろんのこと、発掘、整理、復原に参加された多くの高校生諸君には心から敬意を表する次第であります。

昭和46年3月

青森市教育委員会  
教育長 杉田貞作



# 玉清水 遺跡発掘調査報告書

## はじめに

青森市教育委員会では、先に昭和40年と41年の2年にわたって玉清水遺跡を発掘調査し、縄文式文化後期から晩期初頭までの人工遺物を確認し得た。各年の発掘地点と土器形式がそれぞれ異なっていたので、昭和40年調査の地点を玉清水、翌年調査の地点を玉清水と命名し、その結果の概略は兩年分をまとめて、青森市教育委員会から公刊されている。

ところで、玉清水遺跡と総称される地域の大部分は、個人所有の畑地で、遺物包含地がかなり広いのに、青森市営月見野霊園の造成が進むにつれて、その通路西側にあたる本遺跡を現状のままで保護することは、将来多くの困難を生ずることが予想されてきた。

昭和44年の秋、先の遺跡発掘調査の際にご協力いただいた高橋泰夫氏が、自宅のそばに豚舎を建てることになり、畑地にブルドーザーを入れて地ならしを始めたところ、円筒下層式深鉢形の縄文式文化前期の土器が大量に出土して采た。高橋氏の長男が青森山田高等学校在学中であった関係から、このことが同校助教諭窟西励氏に伝えられ、彼の指導下に同校社会研究部所属の生徒らの手によって緊急に調査が始められた。しかし、ブルドーザーの作業量に対して少数の者の手による調査量には限度があり、また、文化財保護法による届出等の問題もあって、調査は青森市教育委員会の手で行なわれることになった。青森市教育委員会では、青森市文化財審議会委員の小野忠明・井上久の両名に発掘担当を委嘱したが、小野忠明氏は都合により参加できなくなって、井上久が全般にわたって発掘を担当することになった。

この遺跡は、前の二遺跡とはかなり離れていて、土器形成も全く異るところから、玉清水遺跡と命名された。

市教育委員会事務局社会教育課長福井平内氏はじめ課員全員、前記の葛西励・青森県職員中川秀夫・考古学研究者北林八洲晴の諸氏を調査員とし、市内各高校関係クラブ員の参加を得て10月30日から11月3日までの5日間発掘調査を実施した。その結果、縄文式文化早期の尖底土器残片、前期の円筒下層式深鉢形土器、さらに土師器等の出土を見、さらに二基の竪穴式住居址の存在を確認し得た。

参加高校は青森県立青森・青森西・青森北・青森工業・青森商業・青森市立中央・青森山田の7校で、夏季休暇中でなかったために、全面的な参加ができず放課後と土曜日の午後、日曜日だけの参加校もあった。また、先輩の陸上自衛隊員水田政雄（青森北高卒）・国学院大学文学部考古学科学学生石岡憲雄（青森高卒）両名の援助を受けた。調査期間が短かったため、第2号住居址の調査が完結しなかった

ので、この部分については篇西励、北林八洲晴・石岡憲雄の諸氏と山田高校生徒の手によって残務整理

の形で調査が続行された。つまり、青森市教育委員会で行なった調査の前後に、若干の人たちの手で行われた調査があった訳である。また、今回も多くの方々の視察があった。即ち、青森市文化財審議会委員肴倉弥八・札幌大学講師石附喜三男・青森県教育委員会社会教育課主事木村岑男・青森市立中央高校教諭佐藤秀利・県立浪岡高校教諭三浦貞栄治の諸氏である。その他、東奥日報・青森放送・青森テレビの各社が、それぞれ紙面またはブラウン管を通じて調査の実況または結果を広く報道してくれた。

このようにして、玉清水 遺跡の調査は一応終わったのであるが、時間的余裕に乏しかったこと、近くにまだ存在が予想される住居址群の調査ができないまま開発のために消滅しそうなこと等から、翌45年も引き続いて第2次の調査を行なうことになった。

昭和45年は、文化庁と青森県教育委員会から緊急発掘調査費の補助を受け、8月5日から18日まで、途中7日と13日の2日を休日としたが延12日間の調査を実施することができた。

第2次の調査は、青森市文化財審議会委員小野忠明氏を調査主任、同会委員井上久を副調査主任とし、前年参加した北林八洲晴・葛西 励・塩谷隆正（市教委社会教育課主事）をはじめ、県立三戸高校教諭名久井文明・県立郷土館開設準備室主事三宅徹也の5名を調査員にして、さらに国学院大学文学部考古学科学生石岡憲雄・石川長年・丸山保の3名、市内高校クラブ員生徒の参加を得て実施した。

今回の調査では、土器・石器等の出土品が極度に少く、また、住居址もなかなか発見できなかったが、調査日数も半ばを過ぎようとする頃、二基の竪穴住居址を探り当てることを得て、多くの成果を収めることができた。

参加高校は青森県立青森・青森西・青森北・青森工業・青森市立中央・青森山田の6校で、このほかに青森県立高等看護学院から1名（青森西高卒）と県立金木高校先輩1名の参加があった。長い期間中引率してこられた先生方に感謝したい。また、市教育委員会事務局社会教育課でも、新課長竹内一義氏をはじめ全員が参加したのも前年と同様である。

今回もまた前年と同じく多くの方々の視察を受けた。青森市議会議員平山栄蔵・山内米蔵・山内和夫、青森市教育委員会教育長高坂英一・同委員宮川栄一郎、青森市社会教育委員岩谷正雄、青森市文化財審議会委員肴倉弥八・大高 興、県立五所川原高校長木村滋男、山田高校長木村正枝、青森市文化センター館長成田健三郎、青森市中央公民館長長尾文武の諸氏である。各報道機関のご厚意を受けたことも前年と同様である。

## 遺跡の所在地

玉清水 遺跡は、青森市大字駒込字月見野 434 番地の高橋泰夫氏宅そばの畑地である。市街地から駒込の村落に至り、これを南東に進むとまもなく市営バス月見野停留所に達する。ここから道は二手に分れる。左手の道は沢山に達するのでこれは避けて、右手の農道を南方に進み、八甲田の山ろくを少し上ると旧陸軍の射撃場跡が右方に見えてくる。これを見ながら進めば右手に入る小道があり、それをさらに下って行くとやがて戦後入植した開拓農家が数軒見えてくる。ここを過ぎると道は左へカーブするが、そのつき当りに高橋泰夫氏の家がある。

住居の後方に豚舎が 2 棟あって、西側豚舎のさらに西側の畑地が第 1 次の調査地であるが、第 1 号住居址は残っているものの、ブルドーザーによる整地で調査時よりもさらに低くなっている。第 2 号住居址は、新設した私道の下に完全に埋ってしまっている。その豚舎の東側が第 2 次の調査地で、畑地である。市街地から 9km ぐらいの距離で、標高は約 50m である。先に調査した玉清水 ・ 遺跡は本遺跡の南方 500m ぐらいの所にある。

月見野停留所から右手の農道は、そのまま上って行くと、最近一部が完成して公売された青森市営月見野霊園に達する。したがって、この道は近い将来に拡張され霊園参道として整備されることになっている。この道の西側一帯を玉清水と総称しているのだが、字名は月見野になっている所が多い。高橋氏所有の畑地も字名は月見野であるが、古来から呼びならされている玉清水という地名を遺跡名とした。

この玉清水一帯は、縄文式文化各期から土師・須恵の時代までの豊富な遺物包含地になっていて、戦時中は軍有地として保護されていたが、戦後は農地として開放されたところである。ところが、新霊園の開設とそれに伴う参道の拡張等のため、この玉清水一帯も土地売買の対象になってきているようで、早急に保護対策を講じておかないと貴重な遺跡も住宅地その他レジャー用地として消滅してしまうことをおそれるものである。 (井上 久)

## 発掘経過

第 1 次調査 (昭和 44 年 10 月 30 日から 11 月 3 日まで 5 日間)

青森市教育委員会が主体になって調査を実施する以前に、豚舎の西側はすでにブルドーザーによる採土が行われていて、その間に、葛西励教諭の指導で山田高校社会研究部の生徒たちが第 1 号の竪穴式住居址を掘り上げていた。10 月 30 日からの調査中も採土は続行され、採土作業を中止しては調査を続行するといった状況であった。住居址の上層からは人工遺物の出土は多くなく、むしろその周辺から、縄文式文化前期に属する円筒下層式 B・C・D 各形式の土器と、それに伴う土製品、石器等が出土し

ている。

残されている人工遺物をブルドーザーによる被害から少しでも守るため、30日からは、第1号住居址をとり囲むようにして2m幅のトレンチをできるだけ多く設定して発掘してみたが、すでに包含層の大部分は採土されてしまったものらしく、出土品はやはり多くなかった。第1号住居址の実測・写真撮影等の作業も発掘と並行して行ない、その壁面上部からは鳥類と思われる骨が出土したが、酸性が強い土質のためか風化が早く、種類はわからない。とち、くるみ等の炭化物、木炭も少し採集された。早期の深鉢形土器の尖底部分が1個だけ採集された。これは、表土上に遊離していたものである。

第1号住居址から約50m南側の畑地に、円筒下層式の土器片が多数散布している個所があり、そこを借りることができたので、南北に20m、2m幅のトレンチを入れてみることにした。北から6mのところまでは出土品が見られたが、その南側の残り14mの部分から全く人工遺物の出土を見ないまま、粘土層に達してしまった。そこで出土品が多いと見られる6m間を2m×2mの3区に分け、A・B・Cトレンチとし、各トレンチを東に4m延長し、Aa、Ab・Ac、Ba・Bb・Bc、Ca・Cb・Ccの9小区に分けた。Aa・Ab・Acの各小区からの出土品が多かったため、その北側に2m×6mのA トレンチを設け、A a・A b・A cの3小区とした。

出土した人工遺物は、浅い所からは土師器、探い所からは縄文式文化前期に属する円筒下層式深鉢形の土器と、それに伴う石器類が大量に出土して来た。現在の表土は戦後開拓の際トラクター等で整地した後のもので、本来の表土よりはかなり低くなっていることが推定され、土師器を出土した地点からは竪穴式住居址の床面らしい粘土層も出土したが、攪乱されていたため確認はできなかった。これらの出土品はその後の整理の結果、100体近くの円筒下層式深鉢形土器が復原され、B・C・Dの各形式のものを含んでいる。

さらに11月2日になって、B・Cトレンチの東側に高橋氏がとうもろこしの屑を捨てるために掘った穴があり、その底の深さ80cmぐらいのところからも土器片が出土していたので、これにもトレンチを設定するため、東側に4m延長してBd・Be、Cd・Ceの4小区を設定して掘下げてみた。また、A トレンチを西側に2m延長してA a 小区とした。

最終日の3日になって、前日新しく設定したBd・Cdの深さ1m40cmぐらいの所から竪穴住居址の壁面らしい一部分が現れてきた。Be・Ceも夢中で掘下げ、第2号住居址の存在は確認できたものの、晩秋の日がすでに没してもなお完全に掘上げることができず、北林・塩谷・葛西・石岡の諸氏と一部高校生の手によって残務整理の形で調査が続行されたことは前述のとおりである。

発掘調査中も、待ちくたびれた業者は第1号住居址付近の採土と整地の作業を進め、最終日を待たずに第1号住居址はブルドーザーの下敷になってしまった。何ら保存の方法もとられないうまま、無残にもうずめられて行く竪穴の姿を見て、文化財保護行政の無力さをひしひしと感じさせられ、残念であった。



第2次調査（昭和45年8月5日から同月18日まで、途中7日と13日が休日で12日間）  
今回は、第1次の調査地から豚舎を隔てた東側の畑地が調査地である。

8月4日から開始する予定が、雨のため中止になった。5日も朝のうちは小雨だったので中止かと思ったが、高校生がある程度集ったので現地に向い、トレンチを設定して杭打ちをし調査を開始した。東西に20m南北に8mのトレンチは、東から西へ2mずつ、南から北へも2mずつに分け、それぞれA・B・C・D・E・F・G・H・Iと1・2・3・4との記号をつけて小区を設定した。これを4m×4mずつの10区に分けて発掘することにした。相互に1つ飛びの5区を選び掘下げたところ、1区（A・Bの1・2）2区（C・Dの3・4）3区（G・Hの3・4）はまもなく粘土層に達し、洪積世の時代にはこの地点は南が高く北西に低い地形であることが判明した。これら3区には人工遺物もほとんど含まれていなかった。

4区（G・Hの3・4）5区（I・Jの1・2）を掘下げて行くと、5区から粘土層に半ば埋った大石が現われて来た。また、この区の西側に土器の包含層が現われていたので、トレンチを延長して各々4m×4mの6区（K・Lの3・4）7区（K・Lの1・2）8区（K・Lの1・2）を設定し掘下げて行った。

これ等をとおして、人工遺物の出土は予想外に少なかった。土師器、縄文式文化晩期、後期、前期の土器とそれに伴う石器とを確認し得たが、縄文式文化中期の土器の出土は見る事ができなかった。その中で、量的に一ばん多かったのは前期に属する円筒下層式土器とそれに伴う石器類で、それ以外は少量である。

日数も半ば過ぎた14日になって、5区と6区とにかけて円形の竪穴住居址が存在することを突きとめ、これの確認に力を傾注することになった。さらに、翌15日には4区からも竪穴住居址の壁面らしいものが出土して来て、こちらにも力を注がなければならなくなった。

5区から6区にかけて出土して来た第3号竪穴住居址は予想外に大きく、トレンチを拡張しながら掘下げた結果、ややだ円形で、直径の最大部が5m50cm、円筒下層D式の土器が使用された時期の住居址であることが確認された。この間、土師器を伴う石組の炉址が6区の北側拡張区から出土している。また、4区から出土した竪穴の壁面らしいものは、掘下げるにしたがって方形の第4号竪穴住居址の姿を覗わして来た。その直上に、後期の土器を伴った竪穴住居址の床面が現れ、円形と推定されたが、すでに攪乱されていて全容がわからず、確認するに到らなかった。

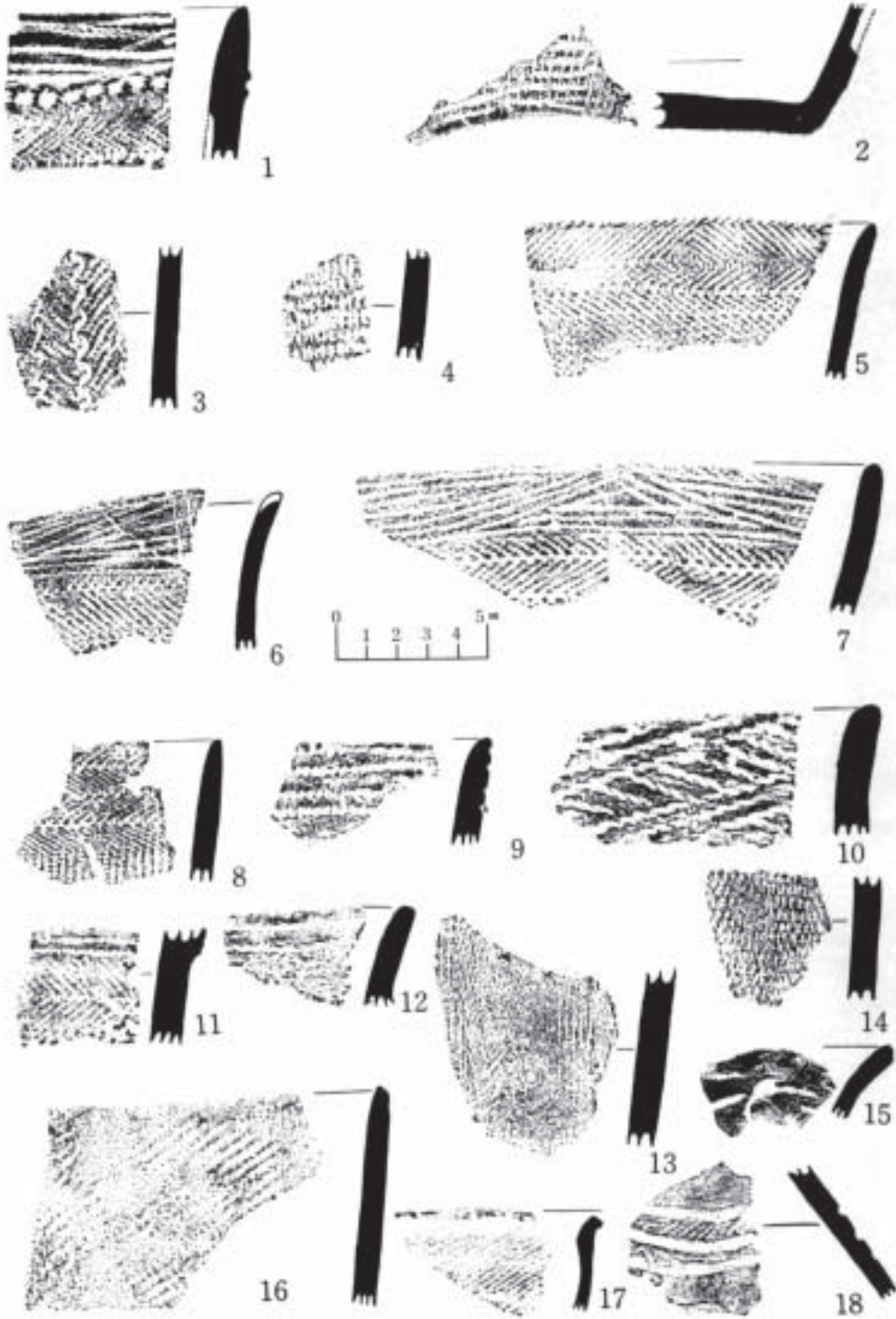
最終日には、第3号住居址の全景を撮影し実測を行う予定であったが、前日の17日午後から大雨に見舞われ、最終日の18日は第3号住居址の水かき作業から始められた。住居址には何と深さ50cmも水が入りこんでいたのである。水かき作業とともに、実測写真撮影を行ない、調査終了後トレンチの埋戻し作業も引続いて実施した。このようにして第2次の調査は、所期の目的を一応達して12日間の全日程を終ったのである。

今回は、特に事前に測量・写真・記録等の各係ごとに責任者を決めて、実際の作業を始めたので、調査の全般にわたってスムーズに行なわれたと思っている。（井上久）

图版 1

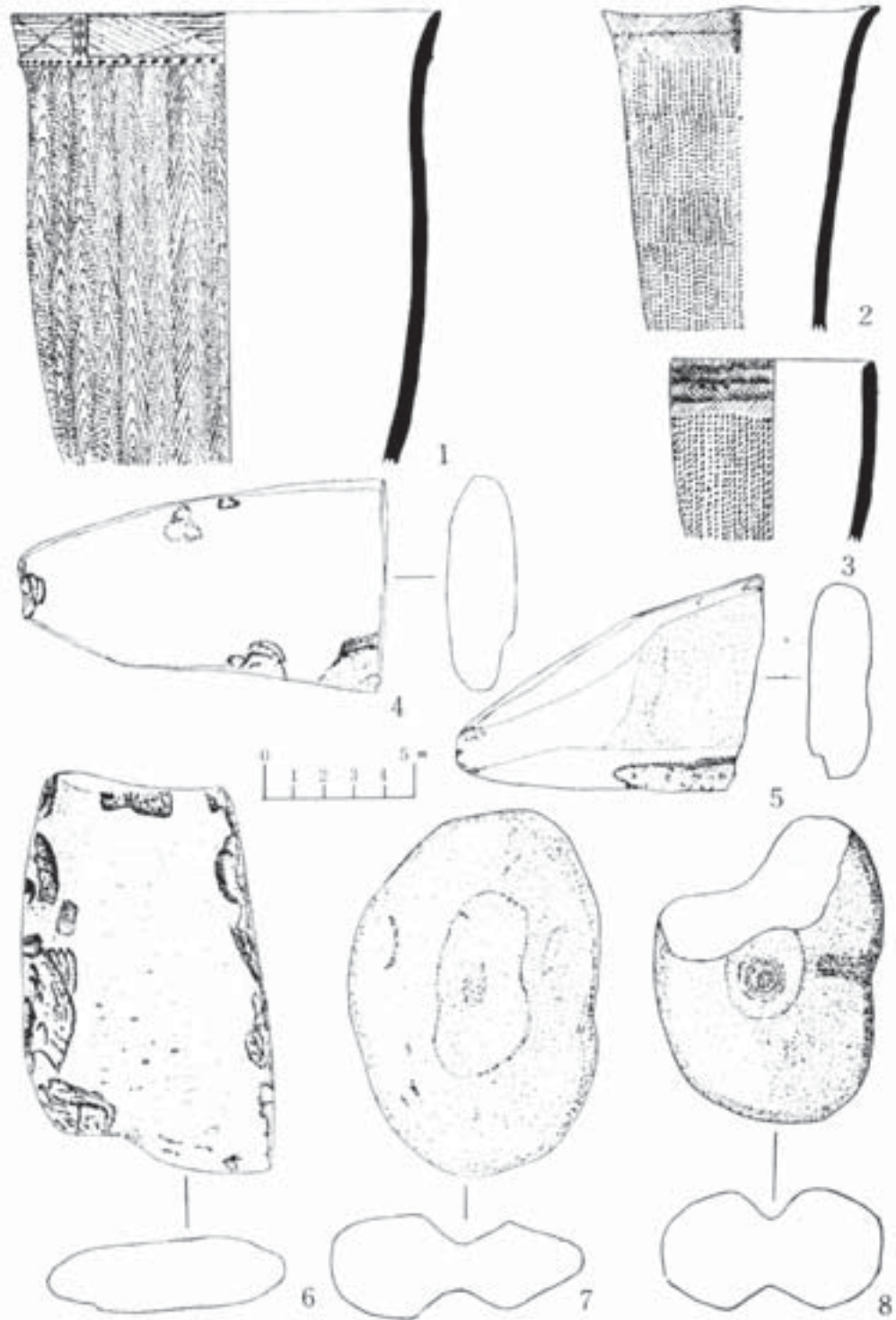


图版 2



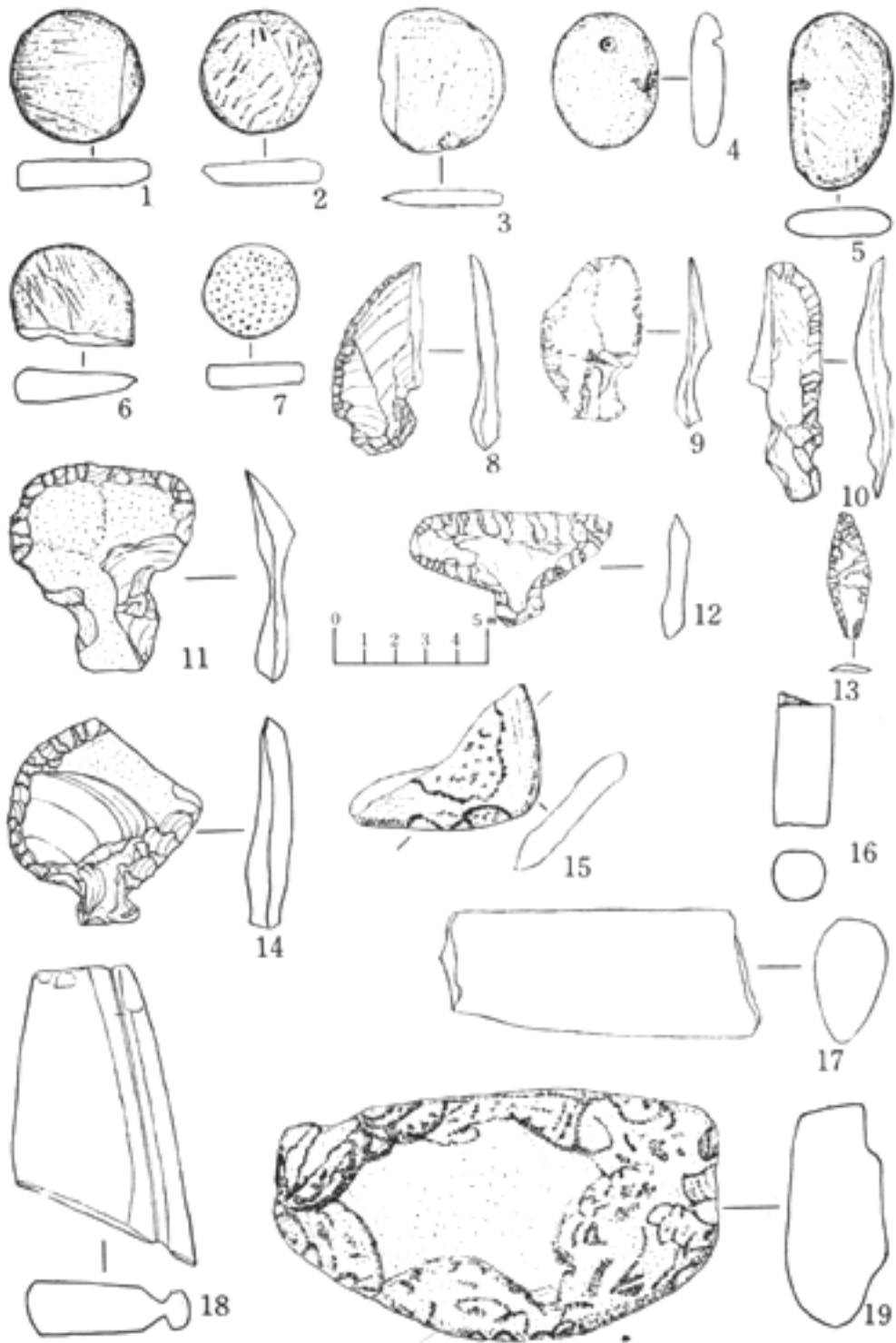


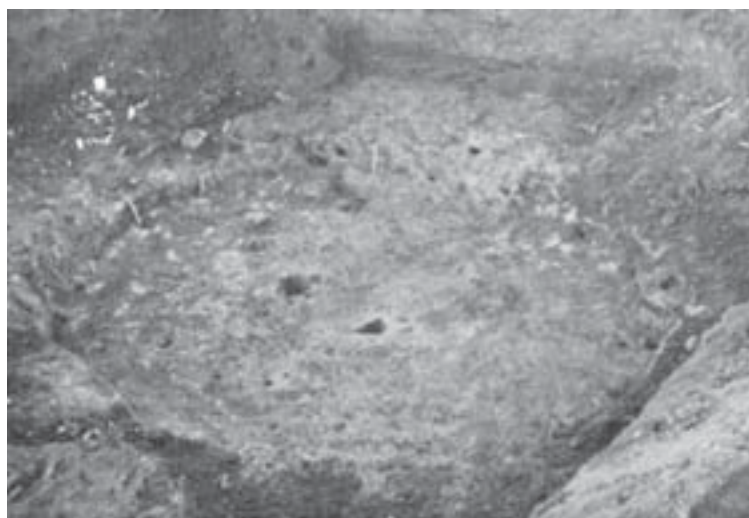
图版 3





图版 4

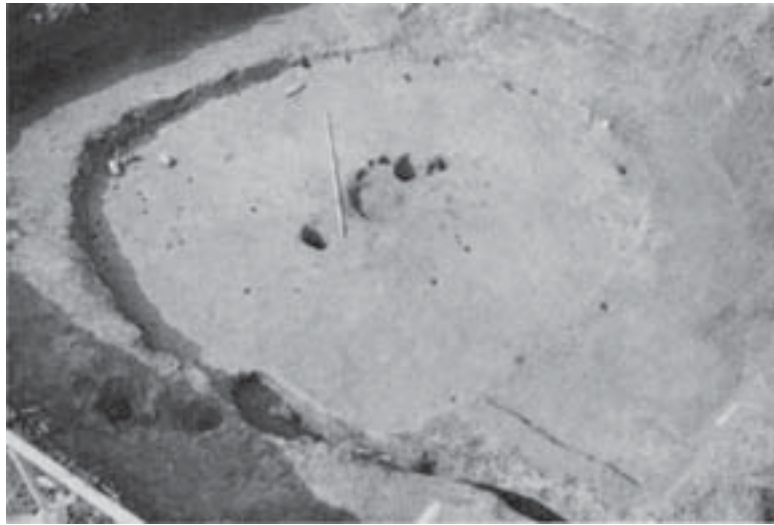




一 号 址



二 号 址



三 号 址



四 号 址

青森市の文化財 6  
玉清水 遺蹟発掘調査報告書  
昭和 46 年 3 月

発行所 青森市教育委員会  
印刷所 株式会社 誠工社